

を行い、色調シミュレート画像として画像編集ソフト「adobe Photoshop®」の色調補正機能を用いて、歯冠色の彩度と明度を変化させた画像を2種類作成した。これを被験者と歯科衛生士に提示し似合い評価を行い、被験者による自己評価と歯科衛生士による客観的評価の結果を比較した。被験者の11のシェードはA1、A2と明度が高く、より白い歯へ憧れていることが伺える。また、色調シミュレート画像の似合い評価は、被験者による自己評価では、より白い歯の画像を、歯科衛生士による客観的評価では、やや白い歯の画像を選んだ頻度が多く有意差が認められた。歯の色の感じ方は、患者と歯科衛生士で違うこと、さらに肌の色や唇の色などに影響を受けることを考慮し、その上で、その人に合った歯の色を提案していく必要があることが示された。

摂食嚥下障害患者への取り組みについて ～現状報告と今後の課題～

宮 福子（附属歯科診療所）

当診療所では摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチを、平成26年4月から行っている。今後も摂食嚥下障害の患者は増加することが予想されるため、担当患者の傾向を調べることで、今後の対応、対策について検討した。

担当患者は評価不能項目が多いような認知の問題がある方、かつ重度摂食嚥下障害の方が多く、そのため現在行っているのはほとんどの方が口腔ケア、アイスマッサージであり、積極的なリハビリテーションの介入は行えていないのが現状であった。誤嚥性肺炎予防が目的の方が多いため、再評価の実施が行われていない場合も多く認められた。

現在は介護施設からの紹介患者が多く、そのため高齢、重度の障害、認知機能の低下を認める患者が対象となっている。重度となつてからの回復は困難なため、障害が進む前段階での紹介となるような支援体制が必要だと考えられた。

第88回：2017年8月31日（木） 座長：渡邊美幸

歯科技工実習における拡大模型の活用 —ポンティックの基底面形態—

五十嵐雅子（歯科技工士学科）

製作したポンティック基底面形態の拡大模型を歯科技工実習に活用し、歯科技工士学科2年生31人を対象に、1年次と2年次の各種ポンティック基底

面形態の理解度をアンケートと筆記試験で調査した。

アンケート結果では、1年次では「離底型」を除く「偏側型」「リッジラップ型」「船底型」「鞍状型」のポンティックを47～92%の学生が「イメージしにくい」と回答した。2年次になって、実習で拡大模型を活用し「偏側型」を除く4種のポンティックを用いたブリッジを製作した結果、84%以上の学生がイメージできるようになった。

2年次の試験結果では総平均が92点で、満点の学生が21人であった。学生がイメージできるようになった理由は、1位が「実習でブリッジを製作したから」2位が「拡大模型を観察したから」3位が「拡大模型を使って説明があったから」であった。以上のことから、実習に拡大模型を活用することは、学生の理解度向上に効果的であったと思われる。

要介護高齢者の摂食嚥下リハビリテーション ～介入から3年経過して～

江川広子（歯科衛生士学科）

野村章子（歯科技工士学科）

平成26年4月より本学附属歯科診療所では、摂食嚥下リハビリテーションを開始した。そこで、最初に介入した99歳の女性、“流涎とむせ”を訴えた患者に対し、3年経過したので報告する。

摂食嚥下リハビリテーションは、歯科衛生ケアプロセスの1)アセスメント、2)カンファレンス、3)計画立案、4)介入、5)再評価を一連の流れに沿って継続した。患者は月2回の歯科受診で義歯調整と歯周メインテナンスのリコール時に、リハビリテーションを繰り返した。

介入は姿勢・体位の確保、筋ストレッチ、呼吸訓練、口唇・頬・舌の訓練、唾液腺マッサージ、音節交互反復訓練、プッシング・プリング訓練をその日の体調に合わせて実施した。口唇訓練では訓練用ボタンを使用して測定した口唇閉鎖力は、初回は400g、現在では1859gに上昇した。患者に測定値を報告すると、上昇することに喜びを感じ自宅では“1本のゴボウ”を唇に加え、強い力で引っ張る訓練を実施していると、誇らしい表情で明るく話をする。患者は高齢にもかかわらず、リハビリテーションを受け入れる意欲が向上し、歯科診療所に来院するのが楽しみとなり、訓練の楽しみが表情を豊かにした。このことから、患者対応に十分配慮しながら、受容の精神で暖かく接することを心がけた。

患者にとってのリハビリテーション効果は、口腔